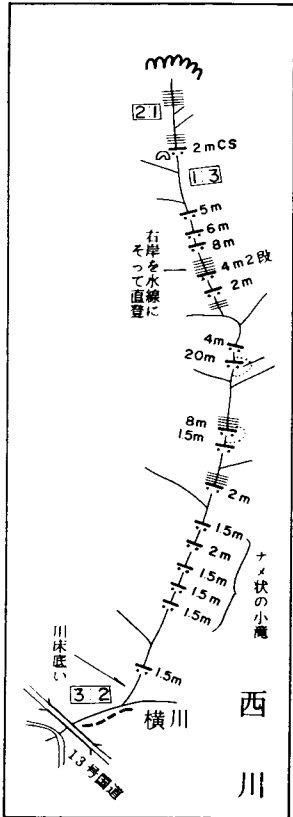


ここから上流は、四〜八段程度と、小沢にしては落差のある滝が続く。いずれも流れ近くを直登する。

左から二本の支流が入ると、水はかなり少なくなってくる。右岸には炭焼き釜の跡がある。こんな奥まで、大変な苦勞であったと思われる。

ここから一五分ほどで、スラブ状のカベに出たので、遡行を終了とし、同じ沢の下降に移る。

(記) 一
「タイム」 出合(一四::一五) ↓終了
(一五::四五)



不動沢

L

一九八三年五月二二日

沢登りは今日が初めてという兼子さんに加え、三人で不動沢をめざす。大滝の近くに車を置き、林道をたどって大力不動尊まで大急ぎで進む。大滝の部落から五〇分もかかるこんな山奥に宿泊施設までそなえた立派なお堂が建っていた。

八時五五分、遡行開始。最初の不

動滝一〇段は直登できそうにも思えたが、初めてワラジを履く兼子さんのことを考えて右岸を捲く。出だしの雰囲気としては上々。暗い沢筋に迫力ある滝とくれば前途おおいに期待というところである。

続いて五段の滝。私が最初に取り付き右岸を直登したが、ホールドも細かく、後続の二人には高捲きを指示する。あとは一転して平凡な沢となった。

しばらく歩いてみると釣人に会った。「奥の滝まで行くのか。」と聞かれる。「葡萄沢山を越えて栗子トンネルの方へ下るんだ。」と答えたら、



不動滝

ツブして落下。補助ロープで確保していたので、事なきをえた。

あとは源流のよそおい。源頭のヤブもそれほど気になるほどのものではなく、一二時五分、葡萄沢山の

頂上に立つ。

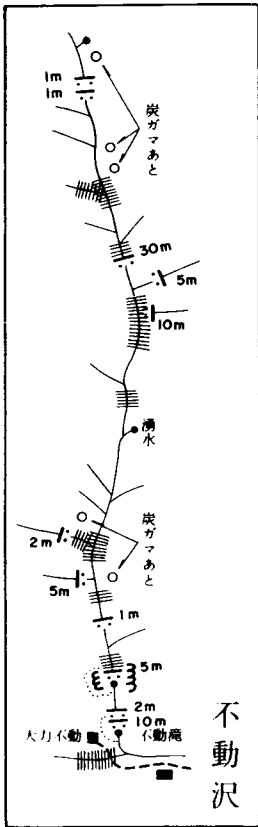
「タイム」 不動滝(八・五〇) ↓ 不動

沢終了・葡萄沢山(一二・五〇)

(記・一)

目を丸くしていた。でもこの釣人との遭遇で、奥に大きな滝があることがわかり、勇気をとりもどして歩いてゆく。

一〇時五〇分、本当に滝があるのかと疑い出してきた頃、ようやく滝が出てきた。階段状になって三〇メートルの落差がある。ホールドが豊富で、割合と簡単に乗り越えることができた。ただし、途中で兼子さんがスリ



不動沢

